

## 「私の気象台」という世界観（巻頭エッセイ）

著者	石橋 博良
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	176
ページ	1-1
発行年	2010-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00004500">http://hdl.handle.net/2344/00004500</a>

石橋博良

### 「私の気象台」という世界観

民営化の議論で必ず取り上げられるテーマに「ユニバーサルサービス」がある。実は「気象サービス」も同じ概念の中で論ぜられることが一般的に行われてきた。

みなさんは、いったんスクラップになることが決定された南極観測船・先代「しらせ」の存続を求める声が高まり、その後利用に関する再公募がなされ、当社提案が評価されて「しらせ」が地球環境を観測（感測）する拠点「SHIRASE」として第二の船出をすることになったことを、ご存知だろうか。

それに先立つ二月一〇日、自衛隊横須賀地方総監部から船体を引き受けるにあたり、私はマーク・トウェインの「みんな誰でも天気のことばは話題にするが、誰もその天気について何かしようとはしない」という言葉を用いて、挨拶させていただいた。そこで言いたかったのは、今我々は「環境」について多くのことを語るが、実際に何か行動を起こすことになると少々ためらいがちになる、ということだ。この感覚は、我々が実現したい「気象文化創造」の世界では、なおさらである。気象は身近なのに、あいまいな科学の話で終わることが多い。

気候変動、環境問題を背景に、気象への対応が世界的にますます重要になってきている。とくに人口を多く抱えるアジアでは、毎年何万という人々が甚大な被害を受け、命をおとしている。

気象災害を防ぐには、どの国も社会資本の注入を待つだけでは非効率である。誰もが自分で気象予測に参加し、リスクを減らせる個人・民間の自助、共助、自律かつ連携した活動が期待されている。我々は今、まさに「天気について自前で何か出来るし、しなければならぬ時にきた」と訴えている。

ところで昨年一二月、アジア・太平洋地域における気象の実用・実践を振興し、気象文化の向上に寄与することを目的に、財団法人WNI気象文化創造センターを設立した。ひとくちにアジア・太平洋といっても、それぞれの地域で気候も違えば生活も文化も大いに異なるが、どの地域でも見上げる空は一つ。その同じ空の下、同センターは気象予測については原始的と言われるかもしれないが、一人ひとりの些細な「草の根の空読み」と、各地域にフォーカスした高度マイクログリッドネットワークシステムがベースの「自前天気予

報」という、世界初の壮大な実験を行おうとしている。

私は、そう遠くない未来に「私の気象台」が一家に一台置かれることになると考えている。それは自己完結型システムからはほど遠い、むしろその逆となる超アナログシステムであり、相互信頼型ソフトである。それは、隣人が参加すればするほど高知能化、高精度化する。その結果、使う誰もがメリットを享受しあう「他者実現・自律分散型のネット気象台」となる。

この他者実現は「誰かの役ちたい」という強い思いが原点にあり、我々のこの人間・ITシステムのよりどころとなっていることは重要である。今日のネットワーク技術とクラウド・コンピューティング技術に後押しされ、「私の気象台」も実現の見通しが見え、それはまた「私の情報発信台」として二一世紀の情報民主主義のシンボルになりそうだと私は感じている。そこに参加する多くのネット市民（NETIZEN）が「私の気象台」に対して少しか、さらよみSORAYOMI“で貢献をしていただける日も遠くではないのでは！

ちなみに、この「リターン」は参加する市民の数だけある。究極の世界平和が実現されている状態を、この地球に住むすべての人が、その人なりに、どこにいてどんな暮らしで住んでいようが、自分自身なりに君と同じレジャー時間を楽しむことができているよと感じられる、そんな社会が実現された時“だと言いつつても良いならば、「気象エネルギーを我々の味方につける技術を人類が探求することこそが今強く求められている」と私は訴えたい。

世界最大にして最強の気象コンテンツ・メーカーであるウェザーニューズの一つのMISSIONとして求められているのは、アジアから気象エネルギーの「正」の部分を我々の暮らしにとり込むような「人間情報システム」を立ち上げることだと考えている。そして今、この「環境生活ソフト日本版モデル」から出発し、アジア版、そして究極のグローバル生活ソフトウエアとして展開したいという大なる野心をいっている。みなさんの「私の気象台」が「アジアの情報発信台」としても威力を発揮する、そんな日を待ちわびている人は、意外と多いのではないだろうか。

いしばしひろよし／ウェザーニューズ代表取締役会長

1947年、千葉県生まれ。北九州大学卒業後、安宅産業に入社。入社2年目に急激な低気圧の影響で船が沈没し、船乗りの命を失う事故に遭遇。これが契機となり、米国の海洋気象情報会社入社。1986年、グローバルに気象サービスを提供する会社ウェザーニューズを創業し、世界最大の気象情報会社に成長。財団法人気象文化創造センター代表理事。